



### 難波恒雄先生の御逝去を悼む

日本生薬学会の名誉会員であった難波恒雄富山医科薬科大学名誉教授が平成 16 年 7 月 24 日未明、享年 72 歳でお亡くなりになられたことは生前の元気な先生を知る方々にとって大変な驚きであったと察する。あと 10 年は御健在で後進の指導や市民への啓蒙活動に携わっていただきたかった。

1970 年、難波先生は恩師木村康一先生の後継者として、大阪大学薬学部から富山大学和漢薬研究施設に赴任した。1974 年に施設は和漢薬研究所に昇格したが、この創設期に、先生は 5 期 10 年に渡る長い間所長として研究所の発展に努めてこられた。富山大学、富山医科薬科大学を通じて 27 年間奉職されたことになり、多くの学問上の業績をあげ、社会的貢献にも尽した。一貫して生薬の基源の解明、品質評価、薬理活性及びその発現機構に関する研究に従事した。原著論文としては和漢薬の生薬学的研究 (215 報)、和漢薬の本草学的、歴史的研究 (26 報)、和漢薬の品質評価に関する研究 (38 報)、和漢薬成分の腸内細菌による代謝、薬効発現研究 (42 報)、伝統薬物による齟齬予防に関する研究 (16 報)、生薬の修治、化学成分に関する研究 (76 報)、生薬の薬理作用に関する研究 (146 報)、その他 (17 報) の計 576 報にのぼる (ウチダ和漢薬の『和漢薬 600 号』)。特に若い頃朝比奈泰彦先生から生薬学雑誌を育てるように言われた経緯を踏まえ、2004 年現在、生薬学雑誌 (Natural Medicines も含む) 投稿者のベストワンになっている (木村孟淳氏調べ)。全論文は『難波恒雄及びその協力者報文集 I-VI』にまとめられている。学術書、翻訳も驚くほど多く、病床のなかで 102 冊目の書物の校正をしていた姿が焼き付いている。

先生は、中国、スリランカ、インドネシア、ネパール、チベット、アフリカなどの広範な地域のフィールドワークから伝統薬物をそれぞれの民族の文化遺産と考える比較民族薬物学を提唱した。先生の収集された世界の民族薬物は 22000 点を数え、富山医科薬科大学・和漢薬研究所の民族薬物資料館に整理、保管され、弟子の小松かつ子助教授により世界でも最も充実したデータベースとして公開されている。

くすりの文化から次第に食文化に興味を抱くようになり、薬膳を中国から紹介し、富山の中華料理、日本料理、西洋料理の料理人に美味しい薬膳を創作することを勧め、また薬

膳友の会を作り定期的に試食会を開いたり、世界各地に食文化を求めてのツアーを企画している。NHK の教育番組に連続出演し生薬を分かりやすく国民に紹介するなど社会サービス精神は旺盛であった。

最後に、先生は中国薬科大学の徐国鈞教授、北京薬学院の故楼之岑教授とは同じ生薬学を通じて強い絆で結ばれていた結果、両先生の紹介で世界に初めて門戸を開いた新中国の若い学生や研究者が次々と和漢薬研究所を訪れ巣立っていった。そして彼らは、今や、中国の生薬学をリードする研究者に育っている。在任中に引き受けた外国人留学生、研究者は総数 102 名にものぼり、そのうち大学教授になった者が 40 名、中国に限定すれば 25 名が大学教授になっている（平成 16 年 7 月現在）。中国北京で開催された古稀の祝いの席（写真はその時撮影）で、100 名以上の日本、中国から集まった弟子達に囲まれながら「教育者冥利に尽きる」と大変喜ばれていた姿を思い起こす。難波先生の功績のなかで中国の生薬学関係者との太いパイプを敷き、日中の友好関係の発展に尽くしたことは忘れてはならないことと思う。

難波先生の御冥福を心からお祈りいたします。

富山医科薬科大学・和漢薬研究所  
所長 服部 征雄

#### 難波恒雄先生ご略歴

|                                                              |                                                  |
|--------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| 昭和 6 年 11 月 8 日                                              | 出生                                               |
| 昭和 29 年 3 月                                                  | 大阪大学医学部薬学科卒業                                     |
| 昭和 36 年 3 月                                                  | 大阪大学大学院薬学研究科生薬学専攻、博士課程修了                         |
| 昭和 36 年 4 月                                                  | 大阪大学薬学部助手                                        |
| 昭和 45 年 3 月                                                  | 富山大学薬学部教授                                        |
| 昭和 49 年 6 月                                                  | 富山大学・和漢薬研究所                                      |
| 昭和 53 年 6 月                                                  | 富山医科薬科大学・和漢薬研究所教授                                |
| 平成 8 年 4 月                                                   | 立夫中医薬学術奨受賞                                       |
| 平成 8 年 8 月                                                   | 和漢医薬学会賞受賞                                        |
| 平成 9 年 3 月                                                   | 富山医科薬科大学退官、名誉教授                                  |
| 平成 10 年 3 月                                                  | 日本薬学会学術貢献賞                                       |
| 平成 14 年 9 月                                                  | 日本生薬学会名誉会員                                       |
| 平成 16 年 7 月 24 日                                             | 逝去（享年 72 歳）                                      |
|                                                              | 昭和 51～53 年、昭和 53～55 年、平成元年～平成 7 年<br>の間、和漢薬研究所所長 |
| 名誉教授：中国薬科大学、吉林省中医中薬研究所、南京中医薬大学、成都中医大学、湖北中医学院、安徽中医学院、重慶市中薬研究院 |                                                  |
| 客員研究員：瀋陽薬科大学、北京大学医学中心、四川省中薬研究所、上海中医薬大学、復旦大学（旧上海医科大学）、新疆医科大学  |                                                  |